

書名：きみはいい子

著者：中脇初枝

出版社：ポプラ社

出版年月：2012年5月

総ページ数：318ページ

ISBN：9784591129388



推薦者

前田一平

鳴門教育大学大学院教授
言語系コース（英語）

～懐かしい人～

昨年春、新聞広告でとても懐かしい人の名前を目にした。中脇初枝。徳島県出身の小説家。ここに紹介する『きみはいい子』の作者です。まだ作家をやってたんだ、というか、生きてたんだ、というのが正直な思いだった。中脇さんを初めて知ったのは、もう20年以上も前のこと。家の都合で高知県の中村高校の生徒だった中脇さんは、小説『魚のように』で坊ちゃん文学賞を受賞した。景山民夫、椎名誠、高橋源一郎、中沢新一、早坂暁というそうそうたる審査委員の絶賛を浴びて、この小説は新潮社から出版され、NHKによってドラマ化もされた。

思春期の女子高校生に特有な感性と心の揺れを弟の視点で描くという高校生離れした技法が斬新だった。家庭の不幸を引きずる少女の家出や自殺願望や蒼い性を、どこか背伸びしながらも斜に構えたような文章表現で描くみずみずしさに、時代は変わっても思春期の心は同じなのだとは思ったものだ。筑波大学に進学したものの、長い間、彼女の作家活動を耳にすることはなかった。

だから、昨年『きみはいい子』の新聞広告を見たときは、遠い記憶がゆっくりと焦点を結ぶような思いだった。しかも、当然のことだが、中脇初枝さんはもう17歳の少女ではない。五つの短編小説から成る本書は都市近郊の住宅地の風景や生活や人の変化を描く。家で食事を与えられないので学校の給食をいつもおかわりし、休みの日には校庭のうさぎ小屋の前にしゃがみこんで心を閉ざす児童と、その子に接する新任教師を描く「サンタさんの来ない家」、わが子にどうしても手を上げながら、自らも母親から虐待を受け続けた過去を、同様の過去をもつママ友達と語り合い、溢れる涙で洗い流す若い母親を描く「べっぴんさん」など、日常に巣食う問題を淡々と描く。中脇初枝さんは四国の片田舎の少女から、都会の団地に住むお母さんになったのだ。そこには生臭い思春期の屈折しがちな心も背伸びもない。県内の大型書店は『きみはいい子』を平積みにし、徳島県出身であることを強調した宣伝文句で飾る。実際、ベストセラーになった。しかし、私には『魚のように』のジャケットに付けられた、あどけなくも暗い顔をした中脇初枝さんが懐かしい。

ただ、教育大学の教員としては、次のように推薦するべきなのだろう。本書の中の「サンタさんの来ない家」は、自分の頃とは様変わりした小学校の教育に違和感を覚える新任教師と、家庭が貧しく、愛情を知らず、心を閉ざしてしまった少年とのぎこちないふれあいを描いていて、教員志望の学生たち必読の書である。

